

最期をどう生きるか問いかける映画！

『75歳以上安楽死容認、映画「PLAN 75」に込めた狙い～社会に蔓延する自己責任論への憤りがきっかけ～』という記事が東洋経済新聞オンラインに掲載されていたのに興味を持って読む。

映画の内容は、少子高齢化が著しく進んだ近未来の日本で、75歳以上の高齢者を対象に、国の支援のもとで安らかな最期を迎えるという、いわゆる安楽死の権利を認め、支援する制度「プラン75」が提唱された。超高齢社会がもたらす、諸問題の解決策を模索していた社会は、一気に歓迎ムードに包まれるが、その制度に翻弄される人々の行く末を描いた作品。

1947～1949年に生まれた団塊世代が全員後期高齢者となる2025年には、日本の人口の5人に1人が75歳以上の超高齢社会になる。この「2025年問題」を前にし、この『PLAN 75』は絵空事とは言い切れないような切実さをわれわれに突きつける。

目の前に少子高齢化の波が押し寄せていて、2025年には5人に1人が後期高齢者になる現実の中で、現役世代が65歳以上の高齢者を背負う負担も少子化が進むのに従い、1950年には12.1人に1人が2015年には2.3人で1人を支えるまでに負担が重くなってきている現実、これからより少子高齢化が進めば一層現役世代の負担が大きくなる現実である。

また、65歳以上の高齢者が増える中で財政的に社会保障費の問題、医療や介護の問題や人材不足、脱施設、老々介護、認知症など、家族に負担がかかり、個人で何とか、という自己責任論によって国が家族や個人に丸投げするようなことにならないためにも共助や公助の支援が成り立つ地域社会を構築することが現実問題である。

そのような中、働けるか否か、生産性の有無、障害の有無による人間に対する価値観としての優性思想によって「働かざる者人に非ず」という価値観などが蔓延し、高齢者・障がい者に対するヘイトクライムが起きることで、生き辛くなり死を選ぶ可能性があるのも現実である。

そのような外的要因による価値観で死を選ぶことのないようにセーフティーネットが充実した社会であるべきだし、価値の多様性を認め、どのような生であ

れ価値を認め、既存で人として価値のないものと位置付ける思想の淘汰が求められていると思える。

高齢になり肉体的、精神的に衰弱して、寝たきり、車いす生活になろうが、希望や生きる意欲が衰えていなければ生きることを選ぶし、希望や意欲がなくなった時、外的要因（健康・経済・生活・家庭・精神的）によってではなく、内在的に自分の人生に納得のいくことを踏まえて終止符を打つ決断ができる最期であってほしいと思っている。

個人的には、安楽死を選択肢として選べる社会であってほしいと思うし、他者に強制されることではないと思っている。

そのような中、人生の最期をどのように計画するか、ということテーマに制度としてアドバンス・ケア・プランニング（ACP）があり、将来の医療及びケアについて、患者さんを主体に、そのご家族や近しい人、医療・ケアチームが、繰り返し話し合いを行い、患者さんの意思決定を支援する制度である。

高齢になると誰もが認知症や重い合併症になる可能性がある中、判断や決定ができない状況になった時などのためにも、家族などに選択させることなく、前もって自分の最期を決めておくことで、安心した最期を迎えられることになると思える。

最期をどのように生きるか、絵空事とは言い切れない切実さを我々に突きつける映画「PLAN 75」は、キネマ館で上映。

東洋経済新聞オンライン 映画「PLAN75」記事

<https://toyokeizai.net/articles/-/589679...>

映画「PLAN75」公式サイト

<https://happinet-phantom.com/plan75/>